加茂市文化財調査報告(1)

千刈遺跡調査略報

—1973—

加茂市教育委員会

発刊のことば

昭和48年3月の初めに、千刈川改修工事中に川底から土器の破片が発見されたということを伊藤景昭氏から県文化財指導員の横山旭三郎氏を通じて連絡を受けた。直ちに県文化行政課文化財主事関雅之、主事本間信昭両氏から現地を視察していただいた。県の先生方との協議の結果、工事を一時中断して急拠、調査することになった。調査は新潟市立工業高校中島栄一先生にお願いして行った。調査は時折雪が舞いおりる河床で行われ、調査に従事された方々は大変寒いおもいをされた。本書はこのような労苦の上に、予期以上の成果を得て作成されたものである。

調査地点は千刈川の川底となり、永久に埋れてしまうことからも本記録は重要な参考になると思われる。

地中に眠っている文化遺産を調査し、昔の社会や文化を知ることは大切であり、この調査記録の活用を望むとともに、遺跡一埋蔵文化財の保護のため、一層の御協力を望んでやみません。

本書作成に苦労されました中島栄一、加茂市歯科医八百枝茂、県文化行政課駒形敏朗の三氏をはじめ、御協力を頂きました皆様に対し、厚くお礼を申しあげる次第であります。

昭和49年3月

加茂市教育長
高　木　　達

例　　言

1. 本書は加茂市大字上条字千刈にある千刈遺跡の調査記録である。

2. 本調査は加茂市教育委員会が主催し、新潟市立工業高校教諭 中島栄一、加茂市歯科医 八百枝茂、県文化行政課嘱託 駒形敏朗が指導して昭和48年3月から4月にかけて行った。

3. 遺物整理は上記3名が中心となって行い、遺物の写真撮影は八百枝茂が、遺物の実測・図版作成は中島栄一・駒形敏朗があたった。

4. 本書は分担執筆し、執筆者名は文末に明記した。

5. 調査及び遺物整理において中村孝三郎・大塚初重・関雅之・金子拓男・本間信昭・戸根与八郎・坂田正一の諸氏から御指導、御助言を賜った。厚く御礼申し上げる。

6. また、下記の方々及び機関から御協力を賜った。記して謝意を表する。　（敬称略）

横山旭三郎・伊藤景昭・小日向正

県加茂川工事々務所

小　柳　組

加茂暁星高校社会科クラブ

三条商業高校社会科クラブ考古班

加茂中学校社会科クラブ

目　　次

1. 調査に至る経過　(1)

2. 遺　　跡　(1)

3. 土　　器　(5)

4. 内黒土器について　(10)

5. ま と め　(11)

挿 図 目 次

第1図 遺跡の位置と周辺遺跡　(2)

第2図 遺跡付近図　(3)

第3図 遺跡地層写真　(4)

第4図 地 層 図　(4)

第5図 土　　器　(6)

第6図 土　　器　(8)

第7図 土　　器　(9)

第8図 支　　脚　(11)

1. 調査に至る経過

千刈川は上流を大皆川と呼び、大沢峠付近より発し、加茂市右岸地域の水を集めて、加茂川に注ぐ小河川ですが、信越線の鉄橋を通る付近が狭くなっておるため、過去数回にわたり氾濫した事があるので、大洪水を起こした加茂川の改修工事の附帯事業として、千刈川の改修工事も進められ、昭和46年秋、信越線の鉄橋の拡幅工事が始められた。其の折、労務者が土器片を発見採取した。

其の後、その話を聞き県文化財指導員の横山旭三郎氏と現場に参りましたが、其の時には矢板打ちも終了し、現況も見る事が出来ず後日採取した土器を実見し、土師器である事を知りました。

48年3月初め、加茂市史編纂委員会主催の講演会で、この話を致しました所、その席におられた伊藤景昭氏が、自宅前の千刈川の拡幅工事が再開され、工事がかなり進んでおるので、翌朝より作業の始まる前に工事現場に入り探索を続けられ、遂に土師式土器の出土する地点を発見せられ、本遺跡発見の端緒を作られました。

当時、横山旭三郎氏は加茂川工事々務所に在籍しておられたので同事務所に連絡し、便宜を計って頂き、合わせて県文化行政課にも報告に出県して頂き、文化財主事 関雅之氏に出土状況等を説明し、視察指導をお願いし、関氏も早速現地に参られ、新潟県でも資料の少ない遺跡だから何んとか都合して調査に参りたいと約して帰庁されましたが、折り悪しく寺地遺跡で配石遺構が発見せられ、次の日曜日ではと云うお話しもありましたので、工事担当の小柳組の方々にもお願い致しましたが四月に入ると農家が多忙になり労務者が激減する事と梅雨期までには一応工事を終了しなければ水害の恐れもある等の事から、学年末で校務御多忙とは考えましたが、新潟市立工業高校教諭中島栄一氏に依頼し、加茂市教育委員会主催で3月18日、中島氏並びに文化行政課嘱託 駒形敏朗 両氏の指導のもとに市内小中学校教諭並びに有志生徒、三条商業高校考古班の方々の応援を得て、発見者伊藤景昭氏、横山旭三郎氏案内で降雪の中、青粘土のぬかるみの中で第一次調査を行い、引き続き小柳組の協力により、出土地付近の工事をあとまわしにして下さいましたので、工事の休日には調査を続行し、四月中旬には一応の成果を得て調査を終了致しました。

（八百枝）

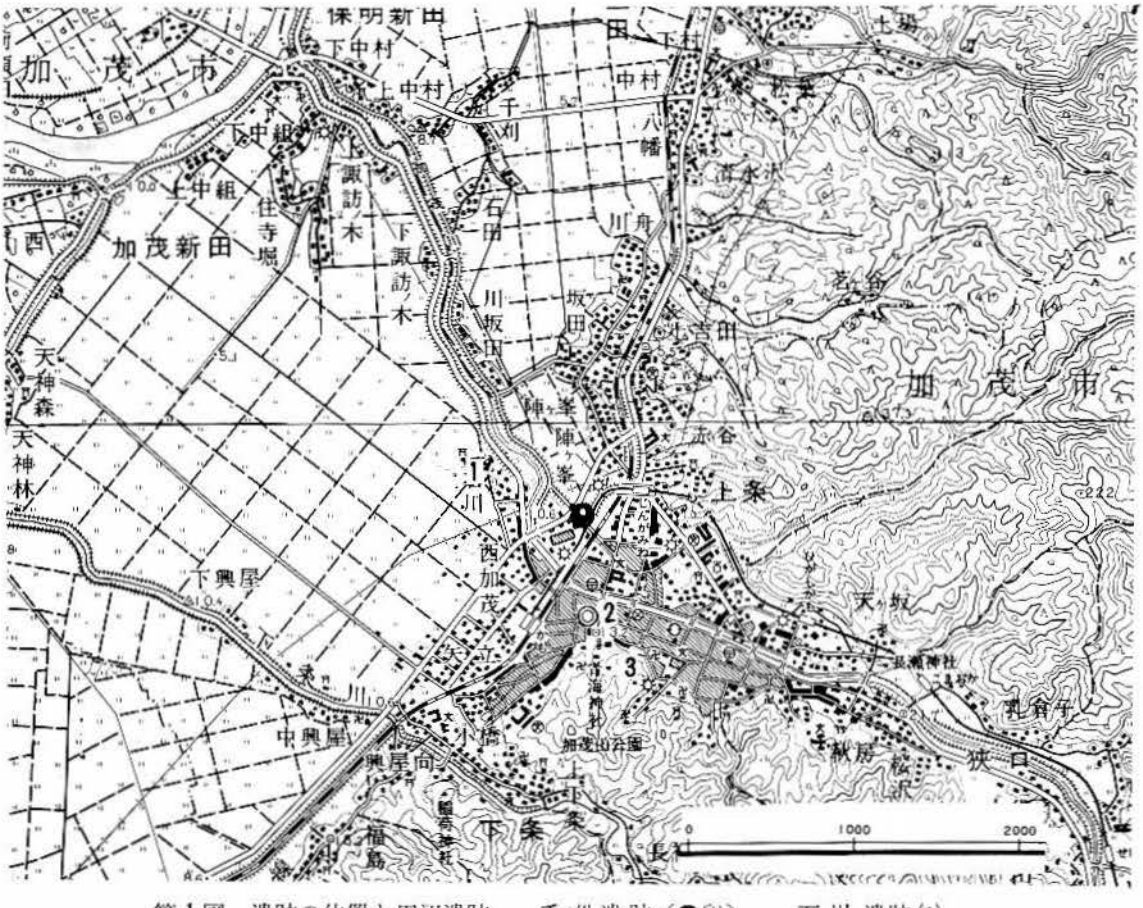
2. 遺　　跡

加茂川の谷口集落として発展した加茂市は歴史上に古くからその名を止めている。延喜式内社青海神社も同市の南、標高50mの地点に位置し、市内を一望にすることができる。また同じく延喜式内社長瀬神社も加茂川の上流にある。加茂川の水源は 加茂市より東南方向に 位置する 粟ケ岳（1.292）、権の神岳（1122）、宝蔵山（897）の越後連山が主要なものであり、同市の北西約2.1 km地点で新潟平野を造成した信濃川に注いでいる。遺跡はこの加茂川の支流である千刈川の河床下であった。千刈川は遺跡の北側、約250 m地点で加茂川と合流している。遺跡は加茂市大字上条字千刈30、31番地地先で、遺跡の西側は県道三条～新津線が、東側は蒲原鉄道、信越本線がそれぞれまたいでおり、その中間に所在する約80mが中心地点となっている。標高約10mの沖積面で、以前は水田であったが現在は宅地、工場用地となっている。信越本線 加茂駅より 北東 約700m の 地点で

ある。（第1図、第2図）

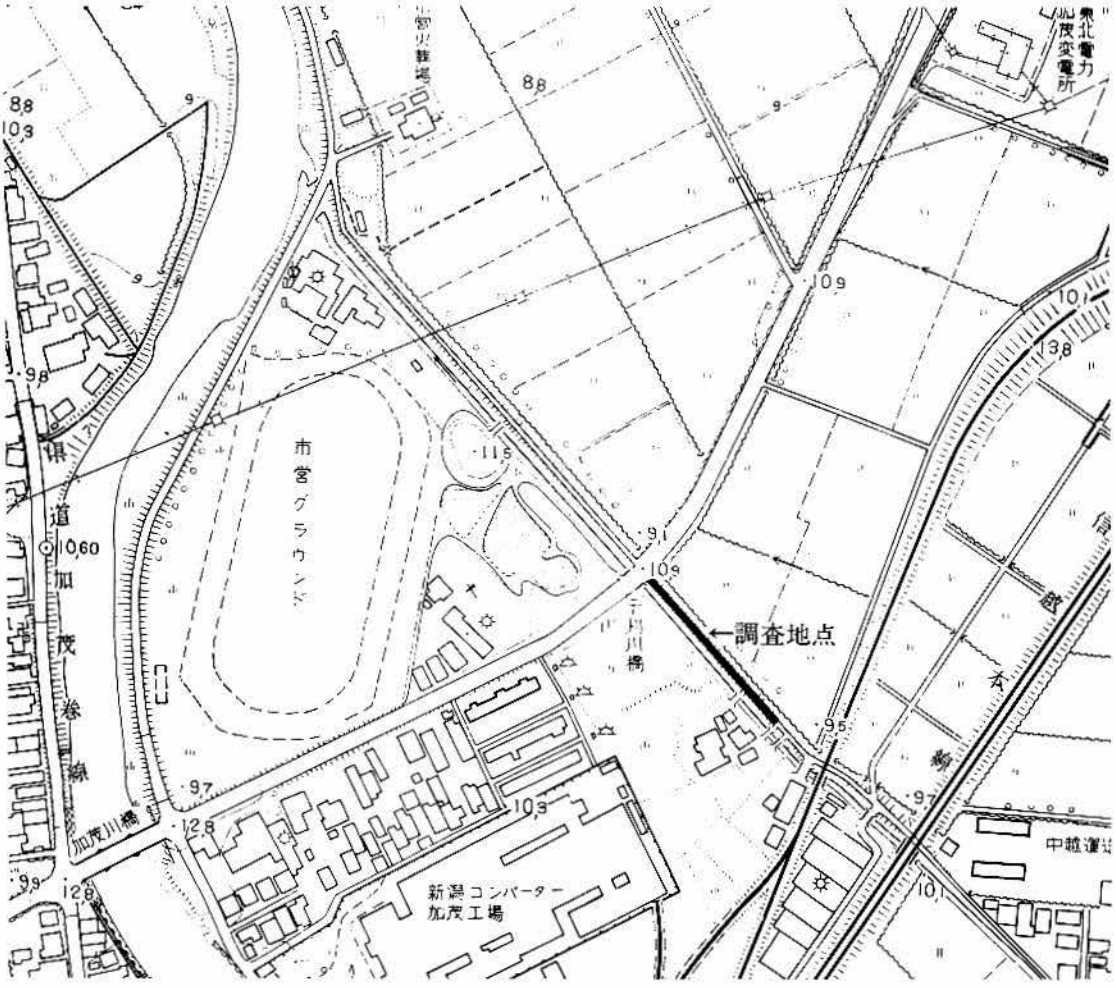
前記したように遺物は千刈川の河床下より検出されたが、地表より河床まで約3 *m*の比高差がある。遺物はこの河床下の青色粘土層の上部より集中的に出土している。地表よりの比高差では3.5 *m*前後となり、標高では約6 *m*の地点より検出されたことになる。（第3図、第4図）第4図の地層柱状図でもわかる通り、主として青色粘土層と砂利層が交互に五枚づつ重なりあっている。青色粘土層は水との関連が強い地層といわれるだけに、この地点も数回となく水に浸ったことは確実であろう。また砂利層も遺跡の東側の丘陵地域より千刈川が運び込んだものであることもほぼ間違いないであろう。この事実から現在も加茂川が暴れ川であることがうなづける。遺跡発見自体も暴れ川である加茂川の改修工事中であり、調査も改修工事の行われているなかで進められたため、遺構、地層層序については全くつかめなかったし、また河床下の遺跡のため足場も悪く、排水も困難であったため、遺物（主として土器）を集めるだけに止まらざるを得なかった。しかし出土した遺物は土師式土器で、県内では数少ない鬼高期のものを主体としたものであった。

新潟県には先土器期、縄文期の遺跡は割合に多く知られているが、弥生期、古墳期の遺跡は前者に比して、はるかに少ない。このことは縄文期の



第1図　遺跡の位置と周辺遺跡　　千刈遺跡（●印）　石川遺跡(1)
青海神社遺跡(2)　市役所遺跡(3)

遺物のように土器片自体が地味なものであるため、あまり注意されないことも一つの理由であろう。また本遺跡のように沖積面の現地表面より数m下に遺物が包含されているため、我々の注意に触れないこともあるのではないかと考えられる。事実、加茂市と隣接する田上町の土居下でも、また湯川でも土師式土器が水田面下1m以上の深い地点より多量に出土したと聞く。時期的には和泉期～鬼高期のものである。以上のことは一般的に言われているように、弥生期以降、生産活動が漁労・狩猟から食料生産へと変化したことが台地上、丘陵上から沖積面へと遺跡の立地の移動があったことは当然考えられるだろう。それも沖積面とはいっても台地、丘陵の縁辺部を中心に移動したと考えても良いのではないかと思う。特に信濃川や阿賀野川とその支流河川の洪水等による堆積活動が現地表下、数mという地点に遺物が包含されることとなる主因であろうと考えられる。実際にこの蒲原地方の人々にとって大河津分水が開通する今世紀初期まで洪水との戦かいであったといえる。最近この信濃川と人間の活動面について考古面からもアプローチを試みている好著がある。



第2図 遺跡付近図 (昭40.5.測図) (1/4.500)

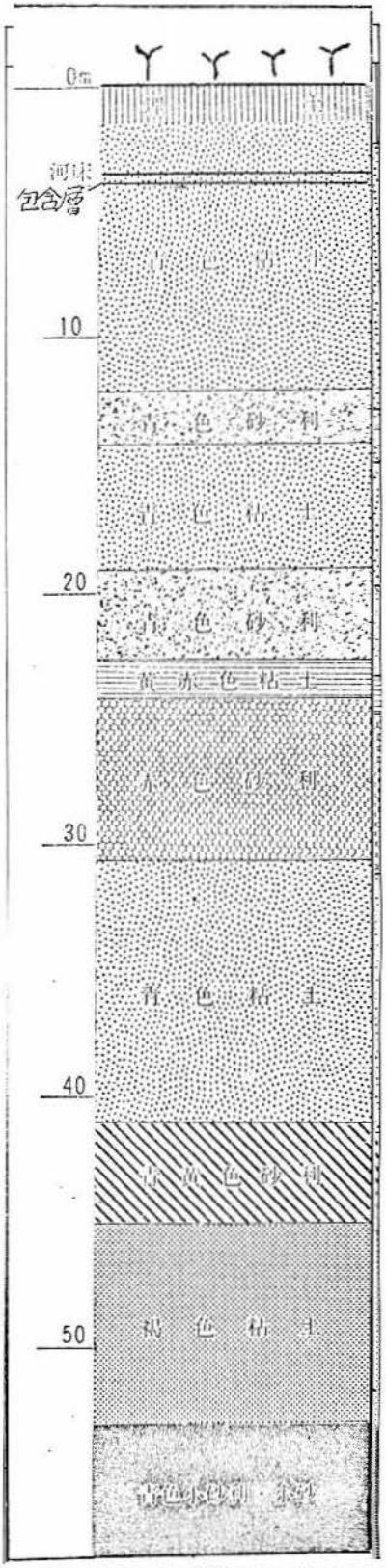
（関雅之一昭和48年）

越後の弥生式、土師式土器は信濃川や阿賀野川水系沿いの台地、丘陵の縁辺部、水田面下にも充分注意を向ける必要があるだろう。またこれらの遺跡から出土するだろう遺物によって越後の弥生期、古墳期について今迄以上に時期的な空白部分が埋められていく可能性があると考える。

千刈遺跡の周辺で土師器を出土する地点としては千刈川が加茂川に合流する地点より西に 200m のところに石川遺跡がある。ここの遺跡の出土遺物といわれるものに絵文様つきの土師器がある。器形は小形丸底坩と推定されるもので、胴下半部に線刻による絵が付されているものである。時期的には五領～和泉期と考えられる。他に青海神社境内に須恵器が採集できる。越後においては古墳そのものも大変少ないが、信濃川が造成した沖積平野を挟んで遺跡からは北西の方向、巻町金仙寺には日本海側の北端といわれている、前方後円墳菖蒲塚がある。菖蒲塚自体は5世紀末から6世紀初頭と考えられている。古墳期以前の遺跡としては加茂市役所遺跡がある。この遺跡も千刈と同様に地表下4mの地点より出土したもので、市役所建築のおり検出され、時期的には縄文中期である。加茂市は地理的にみればほぼ越後の中央部に位置し、歴史的にも古くから人間の足跡が残されていたわけである。

（中　島）

第3図　遺跡地層写真



第4図　地層図（加茂川工事々務所提供）

3. 土　　器

本遺跡から出土した土器は土師器が大半で、須恵器は2個体分だけである。土師器は総数600点を越えるが、そのうち復元実測が可能なものは甕形土器が約100点、杯形土器が130点、高杯形土器が20点、椀形土器5点、甑形土器1点、壺形土器1点である。図示したのはその一部であり、主に完形土器を中心とし、本遺跡を代表する器形を掲載したものである。ただ何分にも未熟なため、御指導を得た諸氏の意を充分に表わせなかったと懸念している。

土　師　器　（第5図～第7図）

甕 形 土 器　（第5図1・2、第6図1～5）

甕形土器の胎土は砂粒を多く混入しており、杯形土器の胎土がよく精選されているのに比較すると雑な感じが受けとれる土器である。焼成も悪く、器面が剥落しているものが多い。胎土の砂粒が器表に浮いているものもある。色調は灰褐色を呈するものが多く、黒ずんでいるものもある。整形は口辺部に横なで整形痕がみられ、胴部は上部から下部方向への櫛状工具によると思われる櫛目が見られ、胴上部にかすかな稜をもつものもある。第5図1は胴中央部のやや上位に最大径を持ち、肩部の張りはそのため緩くなっている。頸部は直立気味で口辺部は外反している。底部は丸底状である。外面は櫛目による整形が肩部より縦位に行われている。内面も櫛目による左右方向の整形がみられ、ススの付着が器面全体にみられる。断面は頸部が最も薄く、底部にかけて厚みを増す。胎土に砂粒、小石を含み、色調は茶褐色を呈する。この土器に近い形態をとるものに第6図2・3がある。第5図2（第6図4）は口辺部を欠く土器で胴部がゆるやかな丸味を持ち、櫛目による整形がみられる。器形は第5図1の土器に似たものとなろう。化粧土が貼られ、胎土には砂粒を含み、焼成良好な土器で、赤褐色を呈する。底部は平底で、ここに3cm幅の笹の葉痕がみられる。第6図5は、これまでの甕形土器とは異なり、胴部は球形に近く、口辺は「く」の字状に折れた頸部から直線的に立ちあがったまま、外へはあまり開かない形態のものである。色調は褐色を呈し、櫛目の整形痕も明瞭に残されている。

甑 形 土 器　（第5図3、第6図6）

本遺跡出土の甑形土器はこの1点しか明確なものはない。色調は黄褐色を呈し、胎土、焼成は甕形土器と同様である。口辺部を外反させ、口唇部は平担面を持っており、最大径が口縁にある土器である。口辺部が篦整形されているため、肩部との接合点に一稜を有している。この接合部より胴部にかけて櫛目痕がみられ、ややふくらみを持つ器形である。甑孔は単一で糸魚川市田伏遺跡、岩船郡三角点下遺跡のものと同じである。

壺 形 土 器　（第5図4、第7図9）

胴部は球形を呈し、頸部が外へ開きながら立ちあがる口辺部を持つ土器である。胴部上半には篦整形によるわずかな稜がみられ、口辺部には、対角線上に2個の孔がある。この孔は口辺内部より生乾きの状態時に開けられたものである。また、胴下半には煮沸によるススの付着が認められ、器面は剥落している。色調は茶褐色で、胎土に大きな砂粒の混入がみられる。

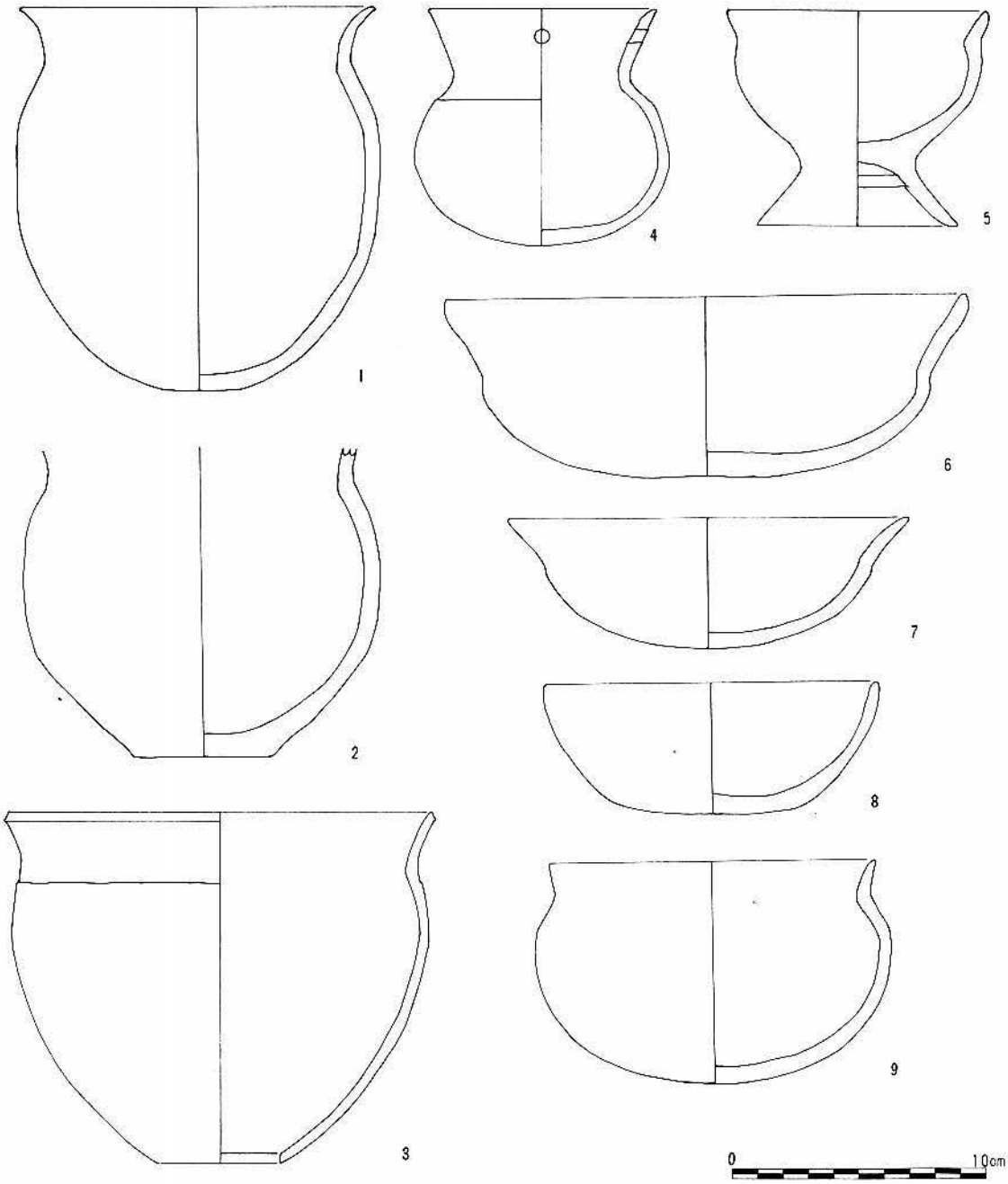
椀 形 土 器　（第5図9、第7図7、8）

高台付鉢形土器と同じ形態をとる土器である。底部は丸底となっている。器内面は黒色処理をしている。これは杯形土器と同じ傾向である。

高杯形土器　（第7図2、3）

図示したのは杯部だけであるが、脚部は裾が「八」字状に開き、短いものが多い。杯部の内面には杯形土器と同じく黒色処理が施されている。

形態は杯部が丸味を持ち、頸部でくびれ、外へ強く開く口縁を持っている。杯部は杯形土器に比べて短くなっている。内、外面とも製作手法は杯形土器と変わらない。



第５図　土　器　甕形土器（1、2）　甑形土器（3）　壺形土器（4）
高台付椀形土器（5）　杯形土器（6～8）　椀形土器（9）

杯形土器　（第5図6～8、第7図4～6）

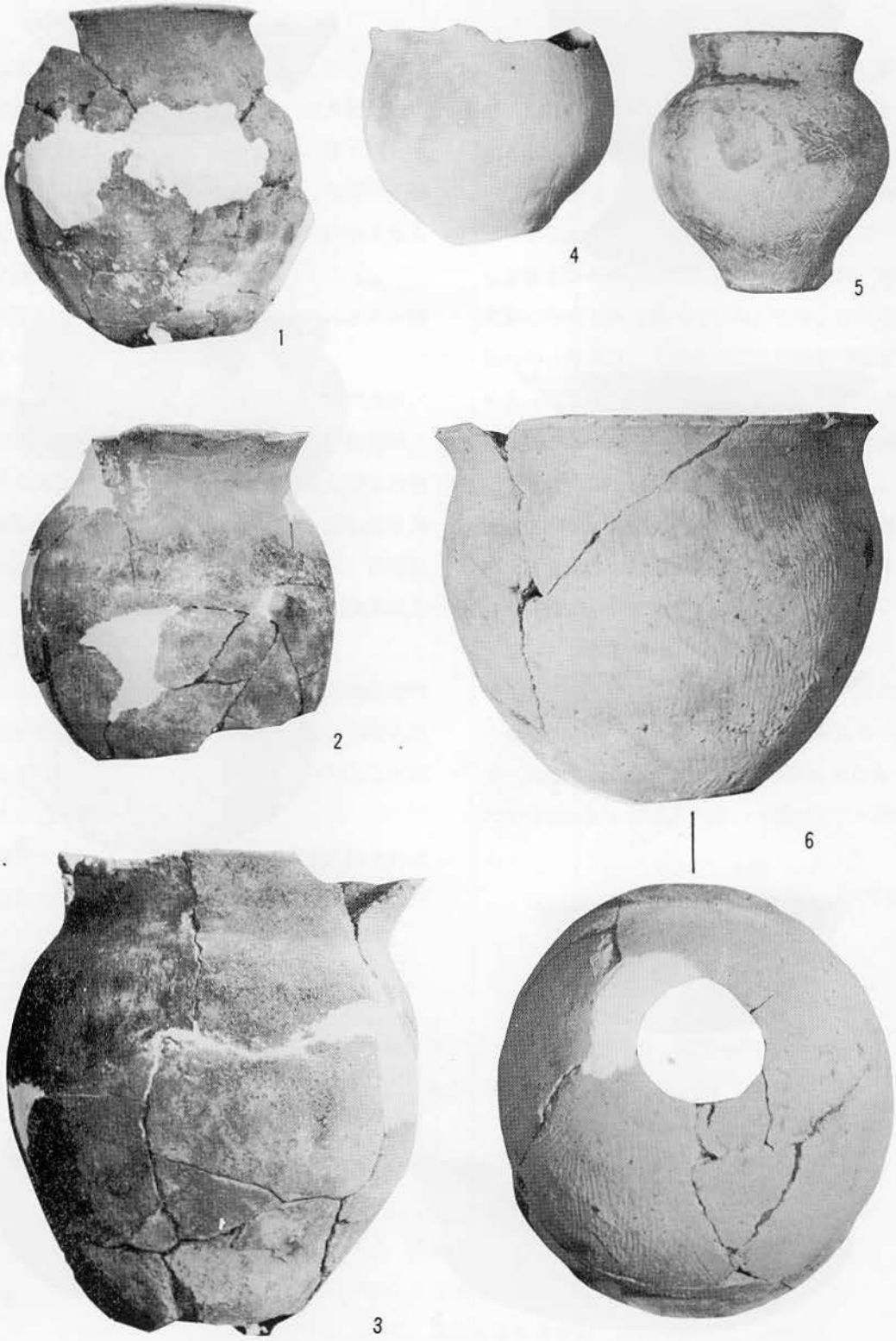
最も出土量の多かった杯形土器は形態的に三つのグループに分けることができる。しかし、共通する点ももちろん多い。本遺跡の杯形土器、高杯形土器、椀形土器の90％以上に、いずれも内面が黒色処理されている。しかも、その大部分は口辺外反部分より底部内面にかけて篦による放射状の磨きがかかって、一種の暗文的効果をねらっているようにも考えられる。体部外面は篦によって整形されている点も多く見受けられ、器面内外ともに光沢を持つものが多い。特に内部の黒色処理されている土器の多くは必ずといってよいほど光沢を持っている。また、いずれもこの種の土器は水漉粘土を張り、胎土、焼成も良好である。器壁は底部が厚く口辺の立ち上り部分が最も薄くなっているのが通例のようである。同時期と考えられる県内の遺跡としては、田伏遺跡と三角点下遺跡が報告されている。田伏遺跡においても杯形土器2類はすべて内黒処理が行われているし、形態的にも本遺跡の土器は田伏の2類B、Cに近似するものが多いと考えられる。また山形県嶋遺跡においても90％以上に内黒処理されていると報告されている。このようにこの時期における杯形土器等に内黒処理が圧倒的に多いということは当地域の特色なものかもしれない。

第5図6（第7図5）の土器は丸底気味の底部より頸部がやや直立し、口縁が外反する土器で、器面内外ともに篦によって整形されている。内面は黒色処理され、底部にはススの付着がみられる。胎土、焼成良好で黄褐色を呈する。第7図4もこのグループのものである。

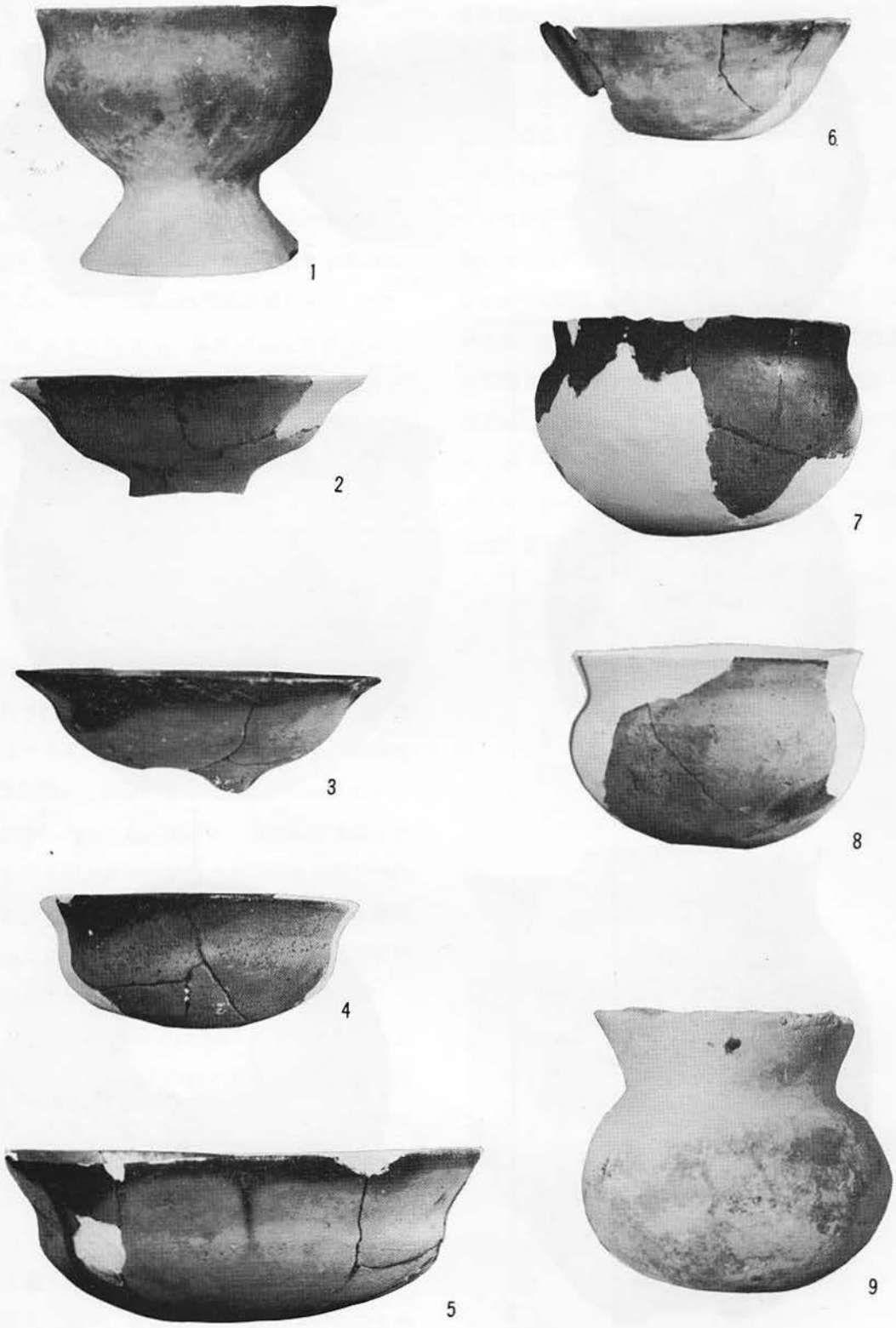
第5図7、第7図6の土器は口辺部と体部を区別し得る土器で、この境にわずかなくびれ部を持つ。これは前者の頸部と違い口縁の立ち上がりが直線的に外傾するために、このわずかなくびれ部が出来るもので、いずれも篦削りによってこのくびれ部が作出されている。底部は丸底状となり、胎土、焼成とも良好で色調は茶褐色を呈す。

その他の杯形土器として第5図8がある。この土器は前記の二つのグループと明らかに形態的な違いをみせるもので椀形に近いものとなり、口縁部がやや内反し、口唇は薄く、平底状となる土器である。第5図6、7の土器と同じく、内面は黒色処理され、製作手法も同じ方法である。外面口辺部には篦削りによる手法が、また底部からの立ち上がりも同一手法が使用されている。胎土、焼成とも良好で、水漉粘土も使用している。色調は黄褐色を呈する。

（中島・駒形）



第6図 土 器 甕形土器(1～5) 甑形土器(6)



第 7 図　土　器　高台付椀形土器 (1)　高杯形土器 (2、3)　杯形土器 (4～6)
椀形土器 (7、8)　壺形土器 (9)

4. 内黒土器について

本遺跡で採集された土師器のうち、杯、高杯、椀等の供膳形態の大部分のものが内面黒色処理がほどこされている。この手法は土器の吸水性と汚れを少なくする事が目的と考えられ、器形の小形のものに限られている事は、技術的制約によるものと思われる。

新潟県周辺における内黒土器の分布は次の各遺跡にもみられる。

糸魚川市 田伏 遺跡、長岡市 御山町 大沢遺跡、長岡市関原下屋敷遺跡、山形県山形市嶋遺跡、長野県平出遺跡、長野県上田市信大繊維学部遺跡、長野県 塩崎中学 遺跡、長野県 佐久間原 遺跡、長野県山岸遺跡、宮城県住社遺跡、宮城県塩沢北遺跡、福島県滝ノ森B遺跡、福島県酢釜台遺跡、石川県小松市借屋第四号墳、

以上のうち山岸遺跡を除く他の遺跡は鬼高期で小笠原好彦氏も鬼高1式の段階で丹塗土師器とほとんど時期を同じくして関東周辺に見られると述べておられる。

田中琢氏（日本の考古学歴史時代上）によれば本遺跡の内黒土器と同一手法即ち、土器の表面、特に内面を篦でていねいに磨き、焼成直後、器がまだ高温のうちに、木片上に伏せ、焼けて煙とともにとびちる炭素の粒子を内側に封じこめ、土器の内面深く吸着させる技法は畿内では8世紀の中頃よりあらわれ 9—10世紀に盛行し、次に窯の改良によるものか両面黒色のものがあらわれ、次第に瓦器に移行したと述べている。このような事から畿内の土師器は、土師部のような国家的職業集団の人々によって作られたもので、技術的には保守的の面があるが、当時は辺境の地であった越後や出羽では、須恵器は小量ながら搬入されて、その良さは判っておったが、その技術はいまだ導入されず、土師器の吸水性を少なくするために考案された技法だったと考えられる。

従って漆を塗ったと思われる光沢のあるものや、内面に銀粉を塗ったように、にぶく銀色に光るもの等が混在しておるので、漆塗りもあったし又、熱いうちに、木蠟等を吸わせたものもあるのではないかと考えられる。今後の研究に期待する。

（八百枝）

参 考 文 献

小笠原好彦「丹塗土師器と黒色土師器」考古学研究第18巻第2号　昭和46年

柏倉亮吉他「嶋遺跡」山形市史別巻1　昭和43年

杉原荘介、大塚初重編「土師式土器集成第3冊」　東京堂　昭和48年

関雅之「田伏玉作遺跡」　糸魚川市教育委員会　昭和47年

関雅之他「釈迦堂遺跡調査報告」「半ノ木遺跡調査報告」北陸高速自動車道、埋蔵文化財調査報告書所収　新潟県教育委員会　昭和48年

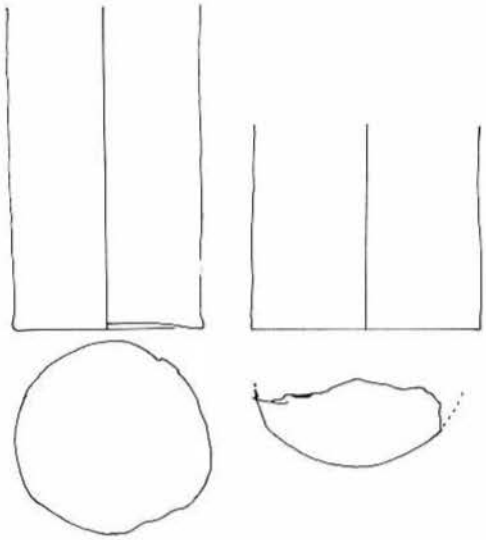
中村孝三郎「先史時代と長岡の遺跡」　長岡市立科学博物館　昭和43年

中村孝三郎他「嵐北の考古」嵐北所収　新潟県教育委員会　昭和48年

本間嘉晴「浦田山遺跡の調査」磐舟所収　昭和37年

5. ま と め

千刈遺跡の出土土器は須恵器の蓋付杯を除き、すべて土師式土器である。器形的には甕形土器、壺形土器、高杯形土器、杯形土器、甑形土器、台付椀形土器であるが、量的には杯形土器が最も多く、次いで甕形土器、高杯形土器で、その他の器形はごくわずかである。形態的にみると甕形では肩部の張りが緩く、すづまりのものが多い。ただこの期のものは長胴形となるものが一般的であるようだが、本遺跡では長胴形と見受けられるものが少ない。このことは一つの地域的特色と理解しておきたい。杯形土器の内面は90%以上が黒色処理され、口辺部と胴部の接合部より底部に向って篦による整形がみられる。これは生乾きの状態で篦みがきが行われたため、黒色処理をされている部分が光沢を持つものが多いと考えられる。形態的にはわずかに頸部を持ち、口縁の立ち上がりが外傾するもの、胴部と口辺部の接合部からほぼ直線的に口辺部が外傾するものがある。その他に素縁の口辺を持ち椀形土器に近いものもある。



第8図 支 脚

時期的にみるならば、器形の組合わせ、形態的な面からほぼ鬼高期の後半（鬼高Ⅱ式）県内では田伏Ⅱ式に併行するものであろう。更に補足するならば台付椀形土器の出現もこの期からといわれるし、甑形土器の底部単孔もこの期に良くみられるものといわれる。また高杯形土器も杯形土器と同様に内面が黒色処理されている。本遺跡は以上のことから古墳時代の終末期の6世紀後半から7世期にかけての土器が単純に出土したと考えられる。

以上のことから本遺跡での人々の生活は6世紀後半から7世紀にかけて営まれたと思われる。そこには我々が数年前まで使用していたカマドの初源的なものがあったであろうと推定される。これは第8図に示したように粘土を円筒形にかためて焼いた支脚が出土していることからわかる。また図示はしなかったが機織の時に使ったと思われる紡錘車も出土している。これまでのことから当時の人々は簡単な小屋掛の住居の中で、機を織ったりカマドで甑などの土器で米を煮たりして生活していたと推察される。

（中島・駒形）

あ　と　が　き

寒い雪の降る日に横山、伊藤両氏から連絡があって千刈川改修工事の現場に行ってみましたが、土器の破片が、どの個所から発見されたのか始めてのことでさっぱり分りませんでした。伊藤氏のお宅に行って発見された土器の破片を見せて頂き説明を聞くに及んで、これは重要な参考になるものだと痛感したものであります。八百枝、横山両氏と話し合いをして、県を始め関係機関に連絡し、各学校の社会科クラブの協力を得て調査をしたのが、それから数日後であります。

最初の調査の日は、また寒さ厳しく、時折り雪が降ってくるし場所が河床であるので調査の皆さんは非常に冷えて苦労されました。その後数回の調査によって土器の破片は思わざるくらい多数発見されました。多数の土器の破片は図書館の職員が水洗いし、中島、駒形両先生の指導によって復元の仕事と図形を取る仕事をしましたが、これが又大変な時間と労力がかかりました。

文化財保護の意識がまだ低いと思われる現在の状態の中で、この資料が多くの協力者の蔭にかくれた苦労があった事を明記して皆様に厚くお礼を申し上げます。

昭和49年3月

加茂市立図書館長　鶴　巻　広　喜

加茂市文化財調査報告（1）

千刈遺跡調査略報

昭和49年3月発行

発行者　加茂市教育委員会

印刷所　西長印刷所

正　誤　表

ページ	行	誤	正
例言	8	坂田正一	阪田正一
1	左9	県文化財指導員	県文化財保護指導員
3	右9	今世紀初期まで洪水	今世期初期までは洪水
7	右2	出来るもので、いずれも篦削りによってこのくびれ部が作出	出来るものであり、体部はいずれも篦整形によって作出
7	右11	篦削り	篦ナデ
11	右10	以上のことから本遺跡	前記したように本遺跡
11	右11～12	思われる。そこには	思われるが、そこには